
クリニックの外来診療

保健会館クリニックの実施成績

丸 茂 一 義

東京都予防医学協会保健会館クリニック所長

はじめに

東京都予防医学協会(以下、本会)に所属する保健会館クリニックでは、1階で一般的な内科外来、専門外来、外来栄養指導、小児の慢性疾患に対する相談や指導、上部および下部消化管内視鏡検査を行い、3階で婦人科および乳腺に関する外来と検査を行っている。

当クリニックは次の2点を目的に設置されている。

第1は、健康診断や各種がん検診で異常を指摘された受診者への精密検査である。異常が指摘された受診者をすべて専門医療機関に紹介してしまうと、それらの施設の機能がまひしてしまう可能性もあり、また紹介された受診者の時間的あるいは精神的な負担も強くなる。また、精密検査結果が必ずしもすべて把握できるわけではないので、異常と判断した結果が正しかったのかどうかを判断することもできなくなってしまう。

当クリニックでできる範囲の予備的な精密検査を行い、「異常なし」「定期的な経過観察」「専門病院への紹介」などに振り分けることで専門病院および受診者の負担軽減を図ることが可能となり、1次検査の結果を確実に把握することでその精度向上にも役立つと思われる。

第2は、地域に密着した医療機関としての立場である。当クリニックは近隣住民のための地域医療の一端を担っており、一般的な内科的疾患や婦人科的な疾患の診断および治療を行っている。新宿区の医師会にも所属しているために、医師会が新宿区から受託して行っている区民の健康診査および各種のが

ん検診を行うとともに、がん検診における2次検診の役割も果たしている。

各外来の実績

2020(令和2)年度の外来の受診者数の推移を図1に示す。2019年の落ち込み(2018年から2019年にかけて年間総受診者数は2,149人減)は、ほぼそのすべてが甲状腺外来の縮小(同じく3,147人減)によるものであったが(表1、図1)、2020年度の受診者数は合計16,206人で、2019年よりさらに4,355人も減少した。この減少はすべての診療科に等しくみられたことから、ひとえに新型コロナウイルス感染症(パンデミック)の影響と考えられたが、2020年度の月別受診者数の推移をみると、年度末までには2019年度の平均値にまで回復する結果となっている(図2)。とはいえ、いまだパンデミックが収束したわけではないので、回復傾向にある外来患者数ではあるものの、その影響が数年以降に疾患の不可逆的な疾患進行となって戻ってくる可能性は残っている。この先パンデミックが早期終結することを祈るばかりである。

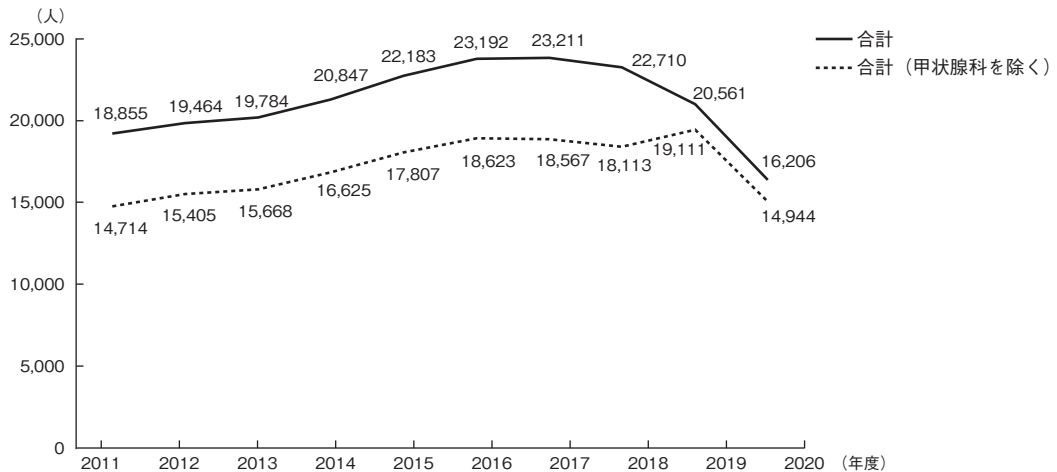
各科別の受診者数と保険点数の月別推移を図3(P104)に示す。婦人科、消化器科、乳腺、甲状腺、内科が受診者数の上位5診療科となっている。収益を目的とするのであれば単価との関係を考慮することになるが、本会の目的はそこではなく、住民が必要とする診療内容を充実させていくことが本来の目的である。2017(平成29)年度の厚生労働統計で取

表1 クリニックの10年間の受診者数推移

(単位：人)

科目	年度	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	
成人 外来	内科	3,890	3,846	3,566	3,049	2,829	2,941	3,165	2,727	2,174	1,194	
	消化器(肝臓病含む)	2,344	2,300	2,602	2,891	3,572	3,886	3,980	4,018	5,553	4,329	
	循環器	828	826	941	830	817	679	341	200	113	79	
	糖尿病	788	811	799	707	752	808	938	1,100	919	943	
	腎臓病	97	135	149	140	136	129	120	144	207	94	
	呼吸器(肺診断科)	674	896	641	694	733	673	723	787	729	582	
	整形(骨粗鬆症)	122	101	100	23	-	-	-	-	-	-	
	乳腺	1,253	1,551	1,537	1,552	1,604	1,723	1,705	1,474	1,501	1,555	
	婦人科	3,482	3,969	4,405	4,979	5,081	5,275	5,195	5,628	5,505	4,092	
	甲状腺	4,141	4,059	4,116	4,222	4,376	4,569	4,654	4,597	1,450	1,262	
	女性(婦人科一般)	328	359	313	501	571	664	773	1,015	1,227	1,097	
	代謝	154	121	120	95	111	93	107	38	35	40	
	禁煙	56	45	25	49	54	33	51	7	12	12	
	呼吸器内科 (睡眠時無呼吸)	257	-	-	662	967	1,128	805	311	523	395	
	外来栄養指導	21	24	32	35	50	48	59	54	38	25	
	小児 相談室	腎臓病	22	20	14	9	37	19	30	29	17	25
		貧血	30	11	25	16	27	10	8	14	12	2
コレステロール		59	57	54	58	65	52	62	75	91	71	
心臓病		117	138	131	159	156	150	141	121	122	109	
脊柱側弯		192	195	214	176	187	229	246	244	220	193	
やせ症		-	-	-	-	58	83	118	127	113	107	
合計	18,855	19,464	19,784	20,847	22,183	23,192	23,221	22,710	20,561	16,206		

図1 クリニック受診者数の推移



り上げられている疾患をみると、患者数の多いものは順に高血圧、糖尿病、脂質異常、慢性腎臓病、心疾患、喘息、大腸がん、乳がん、胃がん、COPD、肺がん、肝がんとなっている(外来通院の場合)。これを潜在患者数として本会の診療科ごとに当てはめ

て比較してみると、循環器、腎臓病、睡眠時無呼吸(SAS)、糖尿病、肺診断科では潜在患者数に比較して受診者数の比率が低く、需要に対して外来供給体制が十分ではない可能性がある(表2)。今後の診療体制を検討していく上で注目されるべき点と考えら

表2 受診者数と厚労省推計全国外来患者数との比較

(2020年度)

外来名	A= 本会 受診者数 (人)	B= 推計患者数 (単位：千人)	A/B (%)
内科	1194	不明	
消化器内科	3056	101	30.3
循環器内科	79	506	0.2
糖尿病	943	224	4.2
腎臓病	94	143	0.7
肺診断科	582	70	8.3
乳腺	1555	28	55.5
婦人科	4092	不明	
甲状腺	1262	不明	
女性	127	不明	
代謝	40	不明	
禁煙	12	不明	
SAS	395	500	0.8

(注) 推計患者数は厚生労働省の厚生労働統計による

れる。一方で潜在患者数が少ないあるいは把握されていない疾患については、本会を受診する人数の多い婦人科、甲状腺、女性外来、代謝などは本会の特徴の一面を表しているといえることが可能である。

各部門の状況

看護部は15人の常勤者および23人の非常勤者が在籍しており、外来、人間ドック、施設内健診、出張健診などの診療の介助のほか、採血や各種の測定などの検査業務や看護業務をそれぞれ交代で担当している。このうち12人は衛生管理者の資格も有し、さらに5人は消化器内視鏡技師の資格も有し、上部、下部内視鏡の介助にも当たっている。

また看護部の看護師は、がんに関する精検結果の追跡調査を分担して行っており、各担当の看護師の努力により追跡調査が行われている。看護師はその他、本会内危機管理委員会の下部組織であるリスクマネジメント部会にも参加しており、その活動により業務マニュアルは日々更新され、インシデントは減少し、看護業務の健全化が図られている。

医事課には常勤5人、非常勤6人の職員が在籍し、3人は衛生管理者の資格を有している。当クリニックに

は、近隣地域のみならず、首都圏広域から受診者が訪れ、その内容も複雑多岐を極める。複数の診療科が同時に進行しているため、業務の正確性、効率化を日々追求し努力を重ねている。当クリニックでは保険診療に関する個人情報を取り扱っているため、職員に対して個人情報保護法に基づく教育を日常的に行っている。

これまで最大の課題の一つであった電子カルテの導入がなされ、試験的運用を経て実際に運用されるようになった。いまだ不十分な点も残っているが、実際臨床の場でフィードバックを受けながらの改善が望まれる状況である。

医師は常勤医7人(内科系4人、婦人科2人、乳腺科1人)に加えて複数名の非常勤医師が各科外来や内視鏡などの検査を担当しており、それぞれの担当を以下に示す。

〈内科外来〉

内科外来には専任の医師はおらず、消化器内科外来、循環器内科外来、糖尿病外来担当の医師が、それぞれの専門外来と同時に「高齢者の医療の確保に関する法律(以下、高齢者医療確保法)」

に基づく特定健康診査および「健康増進法」に基づく健康診査・がん検診を地域住民に対して実施しているが、近隣の住民が各種の症状を訴えて受診する場合も少なくない。また当クリニックの設立の目的に地域医療への貢献があるので、個々の専門にとらわれない総合内科的な外来担当医の存在も望まれている。

〈消化器外来〉

消化器外来は川崎成郎医師が2018年10月から常勤医師として着任していたが、非常勤の松村理史、大久保理恵および新任の星野京子医師が2020年1月から加わり担当している。上部消化管造影での要精検査や便潜血反応陽性者に対する説明や内視鏡検査の受診勧奨と手続き、良性疾患に対する治療や経過観察を行っている。腹部超音波での有所見者に対しては、国立がん研究センター中央病院および日本大学病院と提携し、精密検査や経過観察を行っている。

また、東京都に肝臓専門医療機関の届出を行い、肝臓専門外来を実施している。2019年度は、B型、C型肝炎の薬物療法も実施しており、良好なSVR（ウイルス駆逐）を得ている。肝炎治療の公費負担制度により受診者は増加しつつある。最近、非B、非C型の肝細胞がんが散見され、その多くは非アルコール性脂肪肝炎に起因する。生活習慣病であり、今後の

大きな課題である。

〈循環器外来・心臓精検外来〉

循環器外来は川井三恵医師が2017年4月から担当しており、職場等の健康診断で不整脈や心雑音などの異常を指摘された受診者への説明や追加検査、精密検査機関への紹介が行われている。以前は一般的な高血圧などの診療も行われていたが、心臓精検外来としての立場が強くなり、外来での高血圧などの管理が行われなくなり、受診者数はむしろ減少傾向にある。

〈糖尿病外来〉

糖尿病外来は田川祐未、大平理沙、谷山松雄の各医師が担当し、健診で尿糖や高血糖などが指摘され糖尿病が疑われた受診者に対しての精密検査や、その後の治療が継続的に行われている。

〈腎臓病外来〉

腎臓病外来は濱口明彦医師が担当し、健診で尿タンパク陽性、血尿あるいは腎機能低下が疑われた例に対しての説明や再検査、あるいは精密検査機関への紹介、経過観察などが行われている。

図2 2020年度受診者数合計月別推移

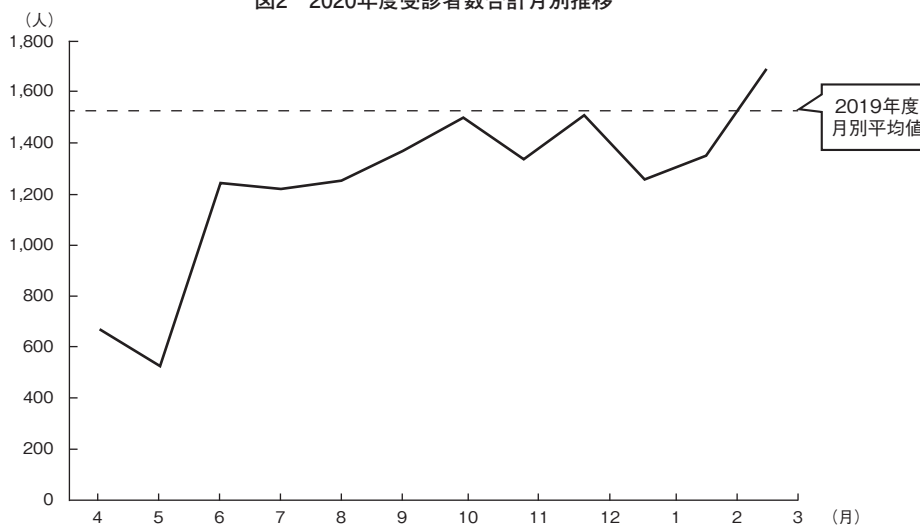
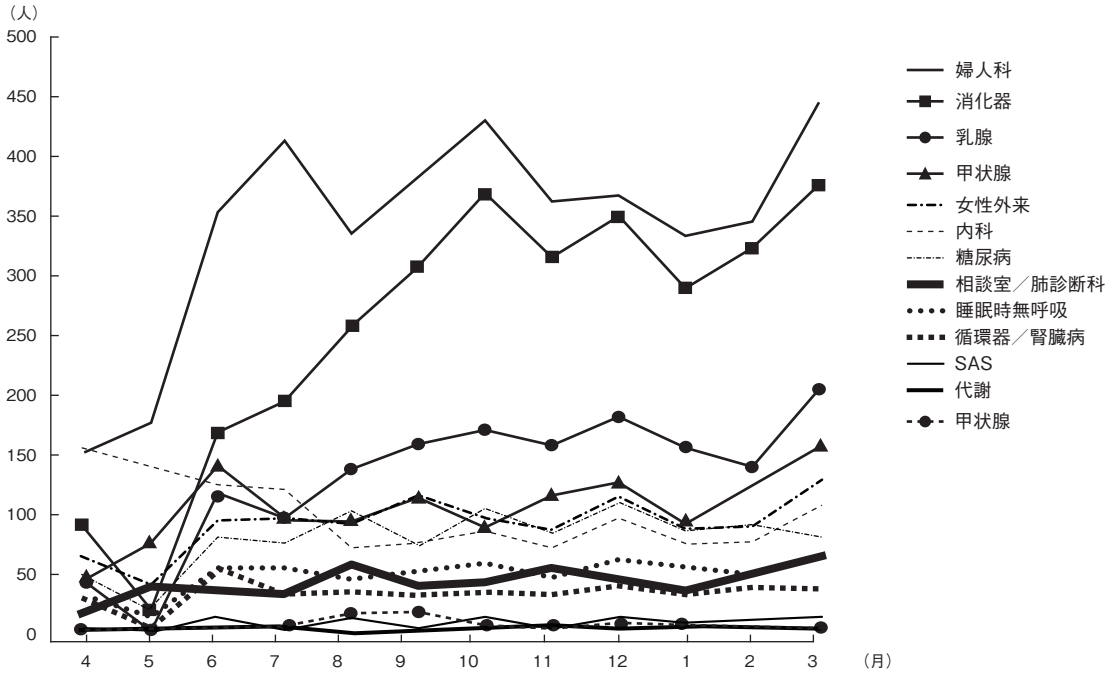


図3 2020年度受診者数月別推移



〈肺診断科外来〉

肺診断科外来は金子昌弘、奥村栄、文敏景の各医師が担当し、健診や肺がん検診の胸部X線で異常が指摘された受診者のCT撮影や、喀痰細胞診の再検などが行われている。最近ではCTで微小なすりガラス状の結節が発見される頻度が高く、これらの定期的な経過観察例も増加している。肺がんが疑われる場合には、国立がん研究センター中央病院やがん研有明病院、あるいは受診者の利便性も考慮して適切な医療機関に紹介し、結核や非結核性抗酸菌症が疑われる場合には感染症の専門病院に紹介している。

〈乳腺外来〉

乳腺外来は坂佳奈子、杉浦良子医師が担当し、本会の乳がん検診で要精検となり、当クリニックを希望された受診者を中心に診療しているが、他機関での要精検対象者や地域住民の有症状患者の精密検査も受け入れている。またマンモグラフィや乳房超音波検査などの画像診断を行い、必要に応じて乳頭分泌物細胞診、穿刺吸引細胞診など質的診断も実施している。

乳がん患者数の増加や社会的要望の高まりにより、

外来患者数は増加しており、軽症例は検診に戻すようにして、精密検査が必要な患者が速やかに受診できるように外来予約枠の確保に努めている。紹介病院については受診者の利便性や希望に応じて多数の基幹病院と連携し、受診者がよりよい治療を受けられるように配慮している。

〈甲状腺外来〉

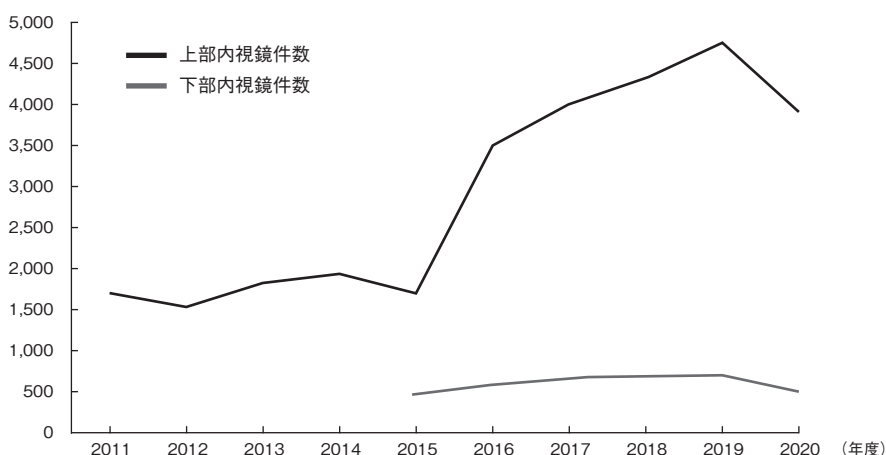
甲状腺外来は岩間彩香医師が担当している。2018年度まで担当していた百浜尚子医師の定年退職に伴って、2019年度には受診者数の減少が見られたが、2020年度以降は維持されている。

甲状腺疾患の治療には定期的な甲状腺ホルモンの値の測定が必要で、本来は最初の受診日に採血を行い、次回にその結果を見て服薬量を決めるが、遠方からの受診者も多いので、状態が安定している患者には結果をはがきで知らせ、結果を聞くためだけに受診しなくてもよいようにするといった患者サービスにも努めている。

〈婦人科外来〉

婦人科外来は木口一成、久布白兼行、西野りり子、

図4 過去10年間の上部および下部内視鏡検査の実数の推移



齊藤英子の各医師と、慶應義塾大学病院からの派遣医師で診療が行われている。

東京都産婦人科医会の会員より紹介された受診者、および本会施設で実施した子宮がん検診や人間ドックにおいてベセスダ方式でLSILとされた例やHPV感染例に対して、コルポスコピー検査、細胞診および組織診を併用して子宮頸がんの早期発見に努めている。

〈女性外来〉

女性外来は金子容子、増田美香子、松田美保の各医師が担当し、がん以外の婦人科疾患についての診療を行っている。検診受診例以外にも近隣地域住民の受診が極めて多く、外来枠を増やして対応している。

〈代謝外来〉

代謝外来は石毛美夏医師が担当しているユニークな外来である。新生児スクリーニング検査で発見されたアミノ酸代謝異常症(フェニルケトン尿症など)や、小児糖尿病検診で発見された2型糖尿病などを対象に、小児から成人に至るまでの成育医療を実施している。

〈呼吸器内科外来, 睡眠時無呼吸外来, 禁煙外来〉

呼吸器内科外来と睡眠時無呼吸外来は福田紀子、

中園智昭医師が担当している。禁煙外来は、2007年4月から行われ、現在は福田紀子医師が担当している。

呼吸器内科外来では、健診や自覚症状でCOPDや喘息などの慢性的な呼吸器疾患が疑われた受診者への診断や治療が行われ、睡眠時無呼吸外来も一定の受診者数が続いている。

〈外来栄養指導〉

外来栄養指導は管理栄養士が交替で担当しており、健診で肥満などを指摘され指導を希望した受診者に対し個別に行っている。受診者は増加傾向にはあるものの、認知度が低く十分に利用されていない。各種疾病の予防のために重要な指導なので、充実を図る必要がある。

〈小児健康相談室〉

小児相談室においては、脊柱側弯症を南昌平医師、貧血を前田美穂医師が、腎臓病を村上睦美医師が、心臓病を浅井利夫医師が、コレステロールを岡田知雄医師が、思春期やせ症を鈴木真理医師が担当している。詳細に関しては学校保健の項を参照されたい。

〈内視鏡センター〉

上部消化管内視鏡検査は川崎成郎、松村理史、竜

崎仁美, 赤井祐一, 大久保理恵, 加藤理恵および昭和大学病院グループの各非常勤医師によって, 同時に2室で検査を行っている。また下部消化管内視鏡検査は川崎成郎, 鈴木康元, 赤井祐一, 竜崎仁美, 大久保理恵の各医師が担当している。

下部消化管内視鏡検査の対象は, 本会で行っている職域や住民の健康診断や大腸がん検診, 人間ドックでの便潜血陽性者に対するの消化器外来からの依頼例が大半を占めているが, 年間1,000例程度の検査が可能であり, 現状ではまだ余力が存在している(図4)。周辺の施設とも積極的に連携して地域医療にも貢献していく必要があると思われる。

おわりに

保健会館クリニックの外来は, 他の一般の診療所

とは異なり, 自覚症状を有する受診者は少なく, 大半は健康診断や各種がん検診, 人間ドックなどで何らかの所見を指摘され, 精密検査やその後の経過観察のために受診しているという特徴がある。また, 健診の内容が多岐にわたるため, 臓器や疾患別に検査の流れも異なり, 業務は非常に複雑だが, 受診者の多くは日常的に社会生活を送っているため, 大半の外来では時間ごとの予約制にして, 待ち時間なく診療できるように努力している。

地域医療へ貢献するためには, 需要に応じた専門外来の充実も重要であるが総合的な内科外来も検討すべきであろう。

一部の診療科や下部消化管内視鏡などではまだ余力があるので, マンパワーや医療機器の有効活用を図りたい。